

# Estuary English の可能性

飯 島 周

〈本小論の目的は、いわゆる Estuary English (文字通りには「河口地帯英語」以下 EE と略す) の現状とその将来についての考察である〉

I. EE という概念と名称は、1980年代初期にイギリスの言語学者 David Rosewarne によって提唱され、以後多くの研究者の注目を浴び、現在ではほぼ確立したものとなっている。

EE の基本的性格は、次の(1)および(2)の記述で説明される。

(1) … nowadays that type of Regional RP which is heavily influenced by Cockney<sup>①</sup> is often referred to as Estuary English (i.e. a middle class pronunciation typical of the Thames estuary). … Gimson and Cruttenden, 1994 p. 86

(2) Estuary English *n.* [*non-technical*] A name sometimes given to a wide spectrum of accents used in southeastern England and falling somewhere between broad Cockney at one extreme and unmistakable Received Pronunciation at the other. … Trask, 1996 p. 134

すなわち、(1)と(2)では多少の差はあるものの、EE は Cockney と Received Pronunciation (「容認発音」以下 RP) の中間体、又は混成体であると言える。そこで、EE の実態を認識するための前提として、まず Cockney と RP について検討する必要がある。

II. Cockney とは、伝統的に、“Bow Church の鐘の音が聞こえる範囲内に生まれたロンドン子” とされるが、同時にその言葉をも指した。ただし、ここでの意味は「ロンドン市街地を中心とする一方言で、主として労働者階級が用いるもの」と解釈すべきであろう。次の記述はそれを

裏書きする。

(3) ... Cockney is as much a class dialect as a regional one. In its broadest form the dialect of Cockney includes a considerable vocabulary of its own, including rhyming slang. The characteristics of Cockney pronunciation are spread more widely through the working class of London than is its vocabulary. Moreover, some traces of Cockney pronunciation are often present in most middle-class speech of the area. ... Gimson and Cruttenden, 1994 p. 85

(3)に示されるように、Cockneyの諸特徴は、音声的な部分を中心として、次第に middle class に滲透・拡散している。それでも、G.B. Shaw の描いた *Pygmalion* (1912) の世界、つまりミュージカル *My Fair Lady* に見られる、Cockney を卑俗とし、排除する傾向は、まだ一部に残っているかもしれない。たとえば、次の記述参照。

(4) The academic hostility to Cockney is caused, paradoxically, by its uniqueness. It is alone among dialects and accents in being exclusively working class. There is no other local speech which the teacher can regard apart. ... Barltrop and Wolveridge, 1980 p. 5

もちろん、(4)の文が書かれてからすでに20年近く経ており、社会情勢の急速な進展は、Cockney の地位をはるかに向上させている。

III. 一方、RP に関しては、次のような説明が一般的である。

(5) Received Pronunciation *n.* (RP) A certain accent of British English (or more precisely a group of closely related accents). Though used by perhaps no more than 3 percent of the British population, RP is generally acknowledged as the prestige standard in England and also by certain social groups in the rest of the United Kingdom and in the British Commonwealth; it is the type of pronunciation most frequently taught to foreign learners of English

(5)に述べられているように、RPは発音そのものであるが、いわゆる Standard English (以下SE)との関連も考慮すべきである。RPとSEは、時に混同されるが、一般にSEとは語彙と文法の面での基準である。さらに、(5)に明記されているように、実際のRP使用者はごく少数であるから、SE使用者の大部分はRP以外の発音、つまり各地の accent を用いていることになる。従って、SEは書き言葉としての標準形式と理解される(この点は、日本における共通語についても同様である)。念のため繰り返すが、SE使用者は必ずしもRP話者ではない。

一方、RP話者は同時に社会的優越性を持つとされて来た。それはRPが“regionally neutral accent”であり、歴史的に見ると“the prestige speech of the Court and the public schools”に由来するからである。RPはさらに“Oxbridge academics”の言葉や“BBC English”として採用され、British Englishの規範となった。しかし、その中には何種ものタイプが生じている。たとえば、General RP, Refined RP, Regional RPである(Gimson and Cruttenden, 1994 p.80)。この3種のうち、2番目のものは、いわゆる upper-class 的な階級性が強く、勢力は減少しつつある。最後のものは、地方性が強く、全体として勢力を増しつつある。

ただ、上記の各種の境界は実際に fuzzy で、RPは一つの Spectrum 又は Continuum (連続体)をなしている。このような連続体は、社会・文化現象のすべての分野において複雑な形で存在し得る。言語の分野でも、水平面だけでなく、(2)に示されたような上下関係における連続体をも設定できるであろう。それは、たとえば International English や New Englishes の分野におけるモデルとしての、Basilect(基層語)、Mesolect(中層語)、Acrolect(高層語)で構成されるような連続体である。(McArthur, 1998 pp.5-6 参照)®

従って、(2)に述べられているEEの連続体の一端となるRPの位置づけも、当然それに準ずる。しかし、Cockneyとは対照的に、RPの社会的権威は全体的に下降しつつある。

#### IV. ここで、EEの具体像を考えてみよう。

EEの実態報告資料として、手頃と思われるのは、Rosewarne, 1994 b

と Coggle, 1993 である。

前者は、RP と EE の特徴的な相違点を、IPA (国際音声学協会) の簡略記号を用いて比較し、EE の体系的記述の第一歩を目指している。

以下、その対比事項の一部を、やや整理して引用する。

- a. RP の dark *l* は、概略 EE の /w/ 又は /uw/ に対応する。たとえば RP /ʃɛlfɪʃ/ (shellfish):EE /ʃɛwfiʃ/, RP /i:l/ (eel):EE /i:uw/ など。
- b. RP の syllable-final、および intervocalic の /t:EE/?/ (glottal stop 「声門閉鎖音」)。たとえば /i?/ (it), /ʔbʌ?ə/ (butter), /ʔne?wɜ:k/ (network) など。
- c. RP の initial の /t:EE/ts/。たとえば /tsɛɪ/ (tea) など。
- d. RP の initial および postvocalic medial の /st:EE/st/。たとえば /ʃtaɪsən/ (station), /ɛʃtʃueəri/ (estuary) など。
- e. RP の initial の /tj:EE/tʃ/。たとえば /tʃu:b/ (tube) など。Cockney では /tu:b/。
- f. RP の /ɪ:EE/i/。たとえば /veri:'prɪti:/ (very pretty) など。
- g. RP の /æ:EE/æ/。たとえば /bæed/ 又は /bæɪd/ (bad) など。
- h. RP の /eɪ:EE/ai/。たとえば /sai/ (say) など。Cockney では /sai/。
- i. RP の /aiðə:EE/'i:ðə/ (either)。Cockney では /i:və/。

上記の他、EE の特徴の一つとして、Yod の脱落、たとえば /nu:z/ (news)、発音における Orthographic form (正書法の形式) と Hypercorrection (過剰訂正) があげられている。たとえば /wɛdɛnzdaɪ/ (Wednesday) など。ただし、Cockney の場合と異なり、our や every などの語頭につく過剰訂正の /h/ は、EE では用いない。

Rosewarne は学問的な立場から分析することを試みており、ある程度の成果を示した。

一方、Coggle, 1993 は、(2)に述べられた連続体を上下縦断的に眺め、その両端にある Cockney と RP を常に視野に入れて EE を説明しようとする。全体的には、専門的と言うより一般読者向けであり、Rosewarne, 1994b とは記述法が異なるが、ある意味ではわかりやすい点がある。多少

長くなるが、その一部を引用する。この部分の標題は The pronunciation of *t* across the speech spectrum (pp. 44~45) である。

The next examples demonstrate the possibilities across the spectrum from conservative or over-articulating RP speaker at one extreme to Cockney speaker at the other:

1. Over-articulating RP speaker:

*At Matt's Christmas party Patricia presented Peter with a cotton sweatshirt.*

(すべての *t* はしっかり tap される、すなわち閉鎖と破裂が明確)

2. Average RP speaker:

*At Matt's Krissmas party Patricia presented Peter with a cotton swea'shirt.*

(ほとんどの *t* は tap されるが、1. の場合ほどしっかりしていない。特に *cotton* のような語では、*tt* はほとんど閉鎖を作らず、*d* に近くなる)

3. RP speaker in relaxed or less formal mode:

*A'Matt's Krissmas party Pa' presented Peter with a cotton swea'shirt.*

4. EE speaker towards the *t*-pronouncing end of the spectrum:

*A'Mats Krissmas partsy Pa' presen'sed Petsuh with a cotson swea'shirts.*

5. EE speaker nearer to the Cockney end of the spectrum:

*A' Mats Krissmas pah'y Pa' presen'ed Pee'[Pete] with a co'on swea'shir'.*

6. Cockney speaker:

*A' Mats Krissmas pah'y Pa' presen'ed Pee' wi v a co'on swea'shir'.*

(with の *th* が 6. の場合は *v* になることに注意。EE ではそうなることは少ない)

この例は、連続体内部での移行状態を示すモデルであり、現実にはもっと複雑であろう。

もちろん、発音ばかりでなく、語彙や文法に関しても同様な連続体が

存在しており、二重否定や Question-tag など、注意すべき点は多い。たとえば、Cockney 寄りの EE 話者は完全否定の際に二重否定を使う傾向があり、主流派はそうではない。Question-tag についても同様で、その形式として、*right' (right)?* や *inni' (isn't it)?* が多用されると言う。なお、Americanism に対して open であることも指摘されている。

その他の参考例として、Coggle の本の表紙には、Oxford English を話す人物(A)と EE 話者を示す人物(B)が描かれ、それぞれに次のように言わせている。

(A) Please telephone at your convenience, Terence.

(B) Give us a bell, Tel!

この例は、連続体の両端とまでは言えないが、語法や単語の面で、明らかに差異を示す。すなわち、(A)は formal な感じで、(B)はくだけ過ぎて印象がある。なお、Tel は Terence の略で、実際には /tseuw/ と発音されるだろう。EE の r 音は一般に [w] に近く、そのため l で表記されやすい。(通例日本語では r、中国語では l で表記される音素が、音声的には、それぞれ l および r の各種にわたる可能性があること——たとえば日、*raito* : 英、*right*, *light* 中、*Láiyín* : 英、*Rhine*、独、*Rhein* など——を参照されたい)

以上で、不十分な説明ではあるが、次の問題に移りたい。

V. EE は、前述の通り、本来 Thames 河口地帯、すなわちロンドンを中心とするイングランド南東部の地域的方言を指すが、現在その通用範囲ははるかに広がっている。

この問題についての、Crystal, 1996 の説明によれば、ロンドンの影響を受けた話し言葉は、すでに Thames 以外に、イングランドの3つの川、北東の Humber、北西の Dee、西の Severn の各河口地帯にまで達している。

このような地域的拡張に加えて、EE は社会的にも勢力を伸長しつつある。職業を問わず一般労働者から管理職まで、芸能人、学者、政治家、その他いずれの階層にも浸透し、王室の若い世代にまで EE と共通の特徴が見られるようになった。

EEの発生および発展は、もちろん歴史的事情、特に第2次世界大戦後の社会情勢と密接に関連する。とりわけ、ロンドン市街部の労働者の周辺への大量移住、ロンドンへの通勤圏の拡大により、Cockneyの通用範囲が急速に広がった上に、マスメディアのパーソナリティや関係者たちが好んで使用するようになったことが有力な原因とされる。その他、社会的平均化の進行、つまり都市労働者大衆の社会的上昇指向、および中流専門職階級の大衆化指向との融合の結果と言うこともできよう。

VI. EEの現状は前述の通りであるが、その将来の予測については、どうであろうか。

(1)に明記されているように、EEがすでにRegional RPの段階に達しているならば、イギリス国民の各層に文字通り“receive”される可能性は大きい。しかし、この点については、まだ検討の余地がある。

ただ、EEにとって有利な材料がいくつか考えられる。その一つは、いわゆる“yuppies” (young urban professionals)、つまり社会的に最も活動的な階級の支持を受けていることである。この人たちは、社会的に成功しても、従来とは異なり、伝統的なRPに言葉を切りかえようとはしなくなっている。

そのことと関連する資料として、Rosewarne, 1998に興味ある記述がある。それによれば、イギリス労働党の現首相 Tony Blair が、ポピュラーなテレビ番組の中で、彼のいつもの“near-RP accent”を“downwards”に調整してEEを用い、さらにCockneyの方向にさえ進んだ、ということである。<sup>①</sup>この事実は、マスメディアにおけるEEの勢力と関係づけられ、その有効性の高さを示すものである。

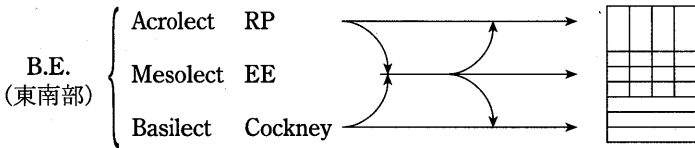
Rosewarne 1994aで提示された質問、“Estuary English—tomorrow’s RP?”に対する答はまだ確定的ではない。しかし、EEがイギリスにおける最も有力な言語形式となり、国際的な英語教育のモデルとなる可能性は、予想外に大きいかもしれない。

#### [注]

① 当然のことだが、どの言語の場合でも、学校教育やマスメディアの影響で、各地の方言色は薄められ、ある種の共通語が発達して来る。Cockneyの場合

も、そのような理由で、RP の方向への、いわば上昇作用が存在している。この作用は、EE の成立にとって重要な条件である。ただし、意図的に Cockney を保持することもあるだろう。筆者の経験では、ロンドン塔の守衛 (Beefeater) には [aɪ'ɪnf] (eighteenth) と発音する者もいたし、British Museum の受付で [ɔ:kəɪ] (O.K.) と言われたこともある。

- ② この3者の関係を British English の南東部に当てはめれば、次の図が想定される。(類似の現象は、すべての言語社会で観察されるであろう。たとえば、日本語における東京の下町言葉の位置づけ)



なお、New Englishes とは 'New Varieties of English' のことである。たとえば Indian English や African Englishes など。この問題に関しては、J. Platt et al. 1984 *The New Englishes*. London, Routledge and Kegan Paul (拙訳『“新英語”の実相』1991 東京、松柏社)などを参照されたい。

- ③ その実例の一つとして “They pu? on a li?uw show for us.” (= They put on a little show for us.) が示されている。すなわち、*t* の脱落 (正確には声門閉鎖音化) および dark *I* の母音 (uw) 化である。その他、*aitch* (=h) を脱落させたことの指摘があり、さらに、Blair と同じ Oxford の出身である保守党の指導者 W. Hague との仮空の対話、'Tony teaches Bill to speak Estuary English' が付録としてつけられ、

Hague has learnt the link between Estuary English, football and popularity with the 'people.'

という皮肉な結びの文で終わっている。

#### 〈参考文献〉

- Bartrop, R. and Wolveridge, J. 1980 *The Muvver Tongue*. London & West Nyack: The Journeyman Press  
 Coggle, P. 1993 *Do You Speak Estuary?* London: Bloomsbury Publishing Ltd.  
 Crystal, D. 1995 *The Cambridge Encyclopedia of The English Language*. Cambridge: Cambridge U.P.  
 Gimson A.C. and Cruttenden, A. 1994<sup>5</sup> *Gimson's Pronunciation of English*. London: Edward Arnold  
 McArthur, T. 1998 *The English Languages*. Cambridge: Cambridge U.P.



- Rosewarne, D. 1994a 'Estuary English—tomorrow's RP?' *English Today* 37, Cambridge: Cambridge U.P.
- Rosewarne, D. 1994b 'Pronouncing Estuary English' *English Today* 40. Cambridge: Cambridge U.P.
- Rosewarne, D. 1998 'Tony Blair and William Hague: Two northerners heading south' *English Today* 56. Cambridge: Cambridge U.P.
- Trask, R.L. 1996 *A Dictionary of Phonetics and Phonology*. London & New York: Routledge